

**「ごんぎつね」**  
**～演劇的手法によって楽しんで読みを深める～**

1. 学年・組      4年東組    36名

**2. 目指す子供の姿**

友達と意見交流をしながら、学習内容に向き合う中で、自分の中に起こった気づきをもとに、もっと深く知りたい、考えたいと思うことを通して、学ぶことの楽しさを実感している子供

**3. 本時における「子供とつくる学び」      4. 「子供とつくる学び」を実現するための手立て**

友達の意見を自分の考えと比べながら聞き、本文を根拠にして自分の考えを深め、生き生きと語る姿を実現したい。本時では、兵十が火なわじゅうを取り落としたところで、ごんのひとりぼっちだったさびしさや知ってもらったうれしさ、それが死の間際だった悲しさやそのようなごんを火縄銃で撃ってしまった兵十の後悔を含めて、自らの読みを、友達の意見とつなげたり、差異を明確にしたりしながら生き生きと語ってほしい。

そのような意見交流のためには、細かな表現描写や伏線に目を向け、物語全体につながりを感じられるぐらい、一人ひとりが本文と向き合っていることが大切である。

しかし、子供たちが、例えば離れた場面の本文を根拠にできるほど、自発的に繰り返し読むということが実はそもそも難しい。それは、読めないからではない。かえって、ある意味で読めてしまうからである。一度通読しストーリーがわかってしまうと、再度読むことには意欲を持ちにくくなってしまう。

そうであるならば、「子供とつくる学び」を狭く冒頭の姿に限定するとしても、自然と再読が促される手立てが必要になる。そして、せっかくなら、その手立てによって再読の時間をも「子供とつくる学び」に変えたい。

前項に記述の内容を実現する手立てとして、「演劇的手法」を用いる。ここでいう「演劇的手法」とは、場面の簡単な劇化、地の文をセリフに書き換える一部分の脚本化、登場人物へのインタビュー、登場人物に聞こえない設定で読者視点から声をかける即興劇である。

活動的な子供たちの実態と「演劇的手法」とは相性が良いと考える。よい演技、よいインタビューにしたいと子供たちは興味を持って臨むだろう。その中で、子供たち自身でさえ気づかないうちにページを繰って本文を読み込み、ああでもないこうでもない話し合うことを通して、言葉と向き合い読みを深めていくことになる。ここに前項に記述の内容の実現を見る。

ただ、気を付けたいことは、子供たちにとってはよい演技、よいインタビューを行うことが目的である点だ。活動を楽しんで終わりということにならないよう、「会議」という本文にもとづいた話し合い活動が生まれる仕組みを作り大切にする。

なお、「演劇的手法」については、今年度すでに、『白いぼうし』『一つの花』『プラタナスの木』『ウナギのなぞを追って』でも手立てとして用いる実践を行っている。

## 5. 教材について

(一) から (六) の場面で構成される物語である。(六) では、視点人物がごんから兵十に変わっている。それによって、それまでごんに寄りそい兵十への思いに共感しながら読んできた子供たちにも、兵十の驚きや後悔を感じることができるようになってきている。その兵十の思いを受け止める時、結末と冒頭の一文の間に繋がりがあることがわかるようになり、本文に沿ってその空白を想像し表現する活動が生まれることになる。なお、視点、情景描写、登場人物の心情の変化が読み取れる行動やセリフが丁寧に描かれていることなど、4年生国語科の教材として秀出の点が、劇化によって読みを深めるのにふさわしい要素ともなっている。

## 6. 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
場面の様子や登場人物の言動、様子などを表す語句について着目し、語彙を豊かにしている。	根拠を明確にして話し合い、一人ひとりの感じ方や考え方の違いを受けて考えを深めている。	叙述に着目して物語を読み、感じたことや考えたことを進んで話し合おうとしている。

## 7. 単元計画

次	時	内容
1	1	ごんぎつねの範読を聞き、率直な感想を書く。場面ごとに登場人物を整理し、大まかな設定を確認する。
2	2	村人にインタビューを行うという活動を通して、物語冒頭に描かれているごんの人物像についてとらえる。
	3	(二) のごんの動作を含む劇化から、ごんの心情をとらえる。
	4	(一) と (三) を比べた後、ごんにインタビューを行うという活動を通して、兵十に対するごんの思いを言語化する。
	5	(四) の加助と兵十の会話を聞きながら、二人の後ろをついて行っていたごんにインタビューを行うという活動を通して、ごんの心情をとらえる。
	6	(四) の加助が後ろを見た場面の劇化と (五) の兵十の影法師をふみふみ行く場面の劇化からごんと兵十の物理的な距離と、心理的な距離をつかむ。
	7	(六) を劇化し、ごんと兵十のすれ違いが生まれる仕掛けに気づく。
	8	(六) のうちの中へ入るごんにインタビューを行うという活動、ごんには聞こえない設定で読者視点からごんに声をかけるという活動を行う。その後兵十の言葉にうなづくごんの表情についても考え、ごんの心情について読む。
9	(六) の兵十が火なわじゅうをばたりと取り落とした場面などの劇化を通して、ごんや兵十の心情について読む。★本時	
3	10~12	前時で読み取った兵十の心情と、はじめの一文とを突き合わせて考え、(六) 以降にという設定で、加助に兵十が語る場面の劇化を考え、見せ合う。

## 8. 本時の目標

ごんや兵十の心情について、根拠を基に話し合い、考えを深められる。【思考・表現・判断】

## 9. 本時の展開

### 児童の学習活動

### 指導上の留意点

#### 1. 劇化している動画を見て、前時のふり返しをする。

- ・昨日は、ごんの心情について考えたね。
- ・兵十に心を寄せていったために、火縄銃で撃たれてしまうことになったんだね。

前時のふり返しは、短時間で、焦点を絞って行いたい。そこで、改めて演技をするのを見るのではなく、電子黒板を用いて前時に行った劇化の動画と板書を映すようにする。

#### 2. 「ごん、おまいだったのか。いつもくりをくれたのは」と言ったところから最後までを劇化するためのポイントを出し合ったあと、少人数の会議を行う。

- ・ごんはうなづいた時、どんな気持ちだったのかな。
- ・死んでしまうごんを見て兵十はどんなことを考えていたのかな。どんな気持ちだったのかな。
- ・どんな位置関係で、どんな表情をしていたのかな。
- ・どうしてこんな風に見えるのかな。

「会議」が読みを語り合う充実した話し合いになるように、「会議」に入る前に、全体の場でポイントとなりそうなことを出し合っておく。不確かな部分や考えが違う部分があることが明らかになることが、自然と再読を促すことになる。

#### 3. 劇化を見合ったあと、どんなことを伝えようとしたか、どんなことが伝わってきたのか意見交流する。

- ・うなづいた時のごんの表情で、ひとりぼっちではなくなったほっとした様な気持ちを伝えようとした。
- ・兵十のただ立っている姿から、とても悲しいという気持ちが伝わってきた。

ここで、劇化した際の兵十の立ち位置や表情を話題にすることで、作品冒頭の一文につながるごんを撃ってしまった兵十について読み深められるようにしたい。

#### 4. 劇化の際に兵十はどこでどんな表情をしていたのか考え、兵十の心情に迫る。

- ・兵十は、ごんのそばで茫然と立っていたと思う。それほど、兵十は悲しかったのだと思う。
- ・兵十は、茫然と上の方を見つめていたと思う。それは、ほっとしたという気持ちまで含めてごんのがわかり、どうしようなく悲しかったから。

劇化をすることがきっかけで話し合いが生まれ、他の人の意見や根拠を聞くことが読みを深めることになったという実感につげられるように、しっかり時間をとって大切にしたい。

#### 5. 本時の学習を振り返る。

- ・この場面はやっぱりとても悲しい。兵十はきっと誰かに話すと思う。それが償いになると。

評価：登場人物の心情について根拠を基に話し合い考えを深めている。【思考・表現・判断】